

## 学位請求論文（課程博士）審査報告書

氏名・（本籍地）：小沼 聖治

学位の種類：博士（人間学）

学位記の番号：甲137号

学位授与の日付：令和5年3月15日

学位論文題目：ソーシャルワークにおけるソーシャルアクションのモデル形成  
—精神保健福祉士の実践に着目して—

論文審査委員：主査 坂本 智代枝

副査 神山 裕美

副査 石川 到覚

副査 田中 英樹

### 論文の内容の要旨（1200字以上）

本課程博士論文の特徴は、2点ある。1点目は、地域共生社会の実現に向けて、ソーシャルワークにおける主要な機能であるソーシャルアクションが求められるなかで、量的研究と質的研究の混合研究法を用いて、精神保健福祉士のソーシャルアクションに対する意識と実践の実態と課題を明らかにしていることである。2点目は、それを踏まえて精神保健福祉士のソーシャルアクション実践における仮説モデルの生成を提示したところにある。その混合研究法の量的研究では、公益社団法人日本精神保健福祉士協会の構成員を対象にした全国調査により、精神保健福祉士のソーシャルアクションに対する意識と実践に関する統計的分析の結果から、その特徴と課題を明らかにしている。また質的研究では、ソーシャルアクションを実践するエキスパートの精神保健福祉士を対象にしたインタビュー調査の詳細なデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの分析法から、より具体的な実践モデルの生成を行っている。

序章では、研究の背景と目的、社会的意義、論文の構成、混合研究法の採用理由、概念規定を示している。第1章では、ソーシャルワークにおけるソーシャルアクションの現状と課題について、北米と日本におけるソーシャルアクション理論に関する歴史的背景を概観しながら、ソーシャルアクションを実践するために必要な資質や能力について考察を加えレビューを行っている。第2章では、精神保健福祉士のソーシャルアクションに対する意識と実践に関する実態調査として、公益社団法人日本精神保健福祉士協会の構成員から年代・所属機関・地域等を平均的に抽出した2,000人を対象とした郵送による質問紙調査を行っている。そこから、単純集計とクロス集計、因子分析、および自由記述欄の質的分析を行っている。これらの分析から、精神保健福祉士のソーシャルアクションに対する意識や実践状況の実態とソーシャルアクション実践を支える要素、実践の促進要因・阻害要因等が導き出している。第3章では、公益社団法人日本精神保健福祉士協会の認定スーパーバイザーとなる要件及び実務経験10年以上のエキスパートとして位置づけた精神保健福祉士15人にインタビュー調査を行い、分析結果から36の概念と4のサブカテゴリー、6のカテゴリーを生成し、ソーシャルアクション実践のモデルを明らかにしている。第4章では、本研究の2段階の調査研究をふまえ、先行研究と比較検討しながら、日本の精神保健福祉領域におけるソーシャルアクション実践モデルを総合的に考察している。また、今後の人材養成や実践力の向上を目指して、ソーシャルワークにおけるソーシャルアクション実践および教育・研究への提言を試みている。終章では、本研究の意義と展望について、精神保健福祉士によるソーシャルアクションの実態を再整理し、今後の実践や教育のあり方について考察を加え、本研究の限界と今後の研究の方向性を示している。

本研究の社会的意義は、ソーシャルアクションの実践に必要な資質や能力を可視化し、精神保健福祉士のキャリア・ラダーや実践力を修得するための研修プログラムの開発に貢献できることと、実践力を高めるためのソーシャルワーク養成教育に寄与できることにある。

## 審査結果の要旨（1200字以上）

ソーシャルアクションを実践する必要性や機会が多いにもかかわらず、ソーシャルアクションに関する理論研究はあまり蓄積されていない。実際、わが国では保健医療や社会保障や社会福祉分野における関係者のソーシャルアクションは、ソーシャルワーカー中心の場合はそれほど多くはなく、患者団体や障害者団体、公害被害等が中心で、ローカルな課題や支援のテーマが限定されたものであった。また、ソーシャルワークにおけるソーシャルアクションの位置づけやソーシャルアクションと福祉課題に関わる社会運動との区別も理論的には整理されていない。

本課程博士論文は、ソーシャルワークにおけるソーシャルアクションを精神保健福祉士のソーシャルアクションに限定して理論的実証的かつ実践的な整理を試みたものであり、意欲的な研究テーマであり、その価値は極めて高く社会的意義がある。

当該論文の審査は、予備審査を経て公開口述試問を実施し、内部副査の神山裕美教授と石川到覚名誉教授、外部副査の田中英樹教授（東京通信大学）及び主査の坂本智代枝との博士論文審査委員会を実施した結果、四者の合議により一致して「合格」と判定した。

評価に値する点は以下の通りである。

日本のソーシャルワーク学に位置づくソーシャルアクション論の進展に多大な影響を受けてきた北米の研究動向を俯瞰しながら、それらの研究動向の系統的なレビューが適切に論述されている。また、直近のソーシャルアクション研究の成果も批判的思考から検証されている。その視点は、日本の特異な精神保健福祉領域における諸課題を多様なソーシャルアクションによって展開されてきた先駆的な実践でさえも、未だに一般化ないし普遍化されていないからこそ、主題のソーシャルアクションを研究対象に焦点化した本研究としてオリジナリティが認められる。

さらに本研究の枠組みでは、トライアングュレーション（方法的複眼）による量的な研究に加え、質的な研究を循環させる研究プロセスが評価できる。その研究手順でも全国の精神保健福祉士によるリアルな業務実態を統計学的方法を用いて解析したうえ、求められるモデル形成を提示するためのインフォーマント（分析対象者）の分析には、実務経験の豊富な管理的業務を担う精神保健福祉士の「語り」から修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる質的な分析も適切に施行され、その結果も的確に示されている。

以上による研究成果は、量的研究によってソーシャルアクションの現実が多くの課題を包含している要因を示したうえ、質的研究によってソーシャルアクションにおけるモデル形成プロセスの可視化により、その展開過程を明示できた研究成果として評価できる。

一方で、本課程博士論文には以下の課題が残されている。本論文の研究対象である精神保健福祉士が専門職団体の限られた構成員であるため、たとえ専門職性を意識する対象者でも本論文のモデル提示が普遍性を持ち得るためには、引き続き継続的な研究への深化が求められる。さらには、本研究成果のソーシャルアクション過程を的確に遂行し得る精神保健福祉士が育成される研修プログラムの開発研究に進展させるよう望まれる。因みに学術的なソーシャルワーク学におけるソーシャルアクション論の位置づけには、未だ精緻に明確化すべき課題が残されており、それと並行して精神保健福祉学におけるソーシャルアクション論の位置づけについても再構成すべき研究課題に取り組まれるよう期待したい。

以上のように評価すべき点と課題を総合的に審査した結果、本大学院博士後期課程における課程博士論文の審査基準に適合した学位論文として認定できる。